

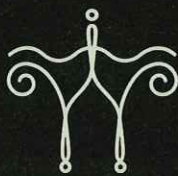
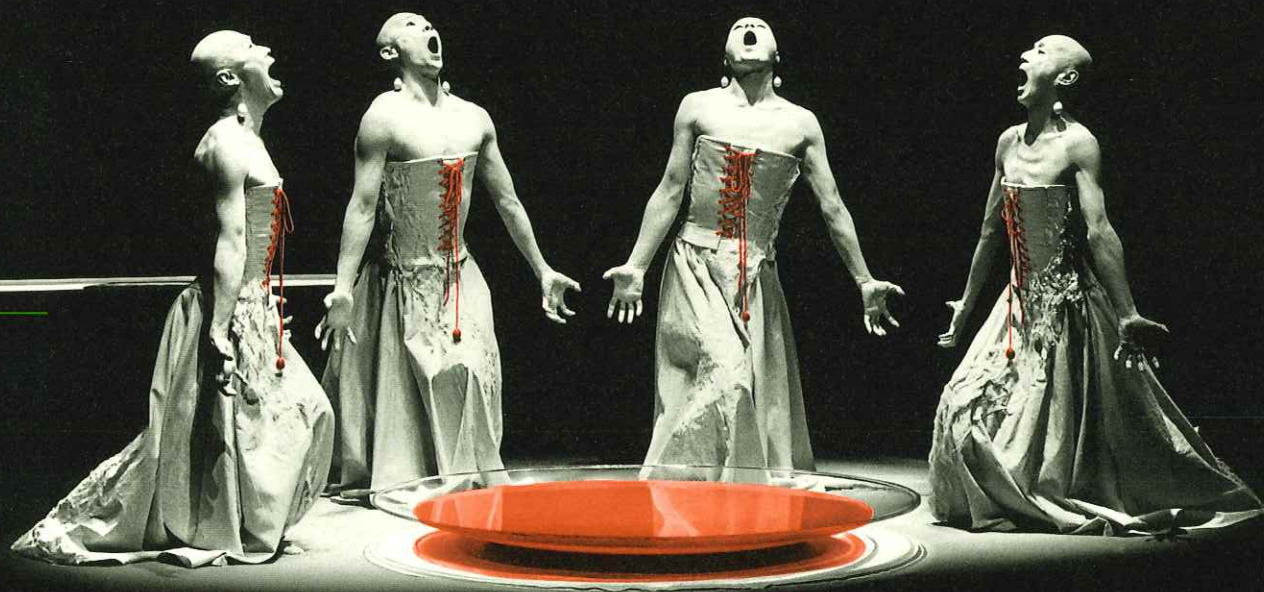
びわ湖ホール 共同プロデュース作品〈新作・日本初演〉

遙か彼方からの—ひびき

HIBIKI

SANKAIJUKU

山海塾



BIWAKO
HALL

1999年5月8日 土 18:00 開演 9日 日 14:00 開演

滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 中ホール

Art Direction: Toshio Yamagata Photo: Birgit

暗闇の中から聞こえてくる水滴の音。舞台一面に敷きつめられた砂。やがて姿を現す、胎児のようにうずくまったまま鼓動を伝える五人の舞踏手。そして薄明の中で冷たい光を放つ十三枚の水盤。このひそやかな音と息をのむ美術をもって、静かに、しかしひと息に、天児牛大は観るものを自分の世界に引きずり込んだ。98年12月パリ市立劇場を埋めつくした観客は、山海塾の新たな飛躍に沸きかえった。『遙か彼方からの——ひびき』の世界初演を眼前にして——。天児の振付は、立つ以前の肉体により丁寧にこだわりながら、踊りがかくも繊細にものを語り、かくも感情的に観客のイメージを呼び覚ますものだという事実を思い起こさせてくれた。そしてこの作品が与える衝撃はこれにとどまらない。山海塾の開設以来はじめて舞踏手の数を増やしたことは景構成に完璧なダイナミズムを与えた。さらに、それを支える、世界37ヶ国で賞賛を浴びてきた天児のソロと、もはや群舞という言葉を使うことをためらわせるような個々の舞踏手がひとりの舞踏家として立脚しつつ紡ぎ出す踊りが、加古隆と吉川洋一郎の音楽に拮抗しつつ、この光と影の交差する「砂と水盤の庭園」で化学反応を起こしているという驚きである。稀有な美しさをもつこの舞台が初めて観るものにさへ懐かしさを感じさせるのはなぜだろう。それは、この『ひびき』と題された作品で観客に聞こえているのは音ばかりではないのかもしれないという推測と符合する。耳を澄まして聞こえてくるのは、心の奥底にしまいこまれた記憶の光景か、あるいは日常と狂気の間で揺れる私たちの心の叫びそのものか。20世紀の終焉を間近に発表された山海塾の『ひびき』は、よりミニマルな舞台作りへ傾倒しつつ、振付家であり演出家、デザイナーでもあるという新しいアーティストの存在形を提示してきた天児が、踊りの可能性を広げ、21世紀の舞踏の力を予感させてくれた一時代を画する作品である。



Photo=Birgit



作・演出＝天児牛大／音楽＝加古隆・吉川洋一郎／
舞踏手＝天児牛大・蟬丸・岩下徹・竹内晶・市原昭仁・
棚秋太洋／舞台監督＝小林裕二

主催＝財団法人 びわ湖ホール／共同プロデュース＝財団法人 びわ湖ホール／パリ市立劇場／アイオワ大学ハンチャーオーデトリウム／山海塾／初演＝1998年12月パリ市立劇場

化粧品提供 SHISEIDO／素材提供 三菱レイヨン

●入場料＝S席 4000円／A席 3000円

●チケット取り扱い＝びわ湖ホールチケットセンター 077-523-7136／チケットぴあ 06-6363-9999／チケットセゾン 06-6232-9999／京都音協プレイガイド 075-211-0261



滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール

BIWAKO HALL CENTER FOR THE PERFORMING ARTS, SHIGA

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜15番1号 ●交通のご案内／大阪から39分、京都から10分、名古屋から60分（JR利用・大津駅着）●JR琵琶湖線「大津」駅、「膳所」駅より徒歩約15分 ●京阪電鉄「石場」駅より徒歩約3分 ●名神高速大津ICより約5分（びわ湖ホール駐車場854台・有料）●JR大津駅より定期バス運行